

# 学生のページ

## 海外に羽ばたく

### 第9回 技術を伝える

せき かつみ みずたてつお  
関 克己・水田哲生

「海外に羽ばたく」シリーズも第9回目を迎え、これまでさまざまな貴重な体験をお持ちの方々にご登場いただきました。今回は海外の工事現場で実際に現地の人と出会いながら仕事をなさった経験を持つ大日本土木（株）の新庄光男氏にお話を伺いました。新庄氏は大学卒業後、海外青年協力隊に参加されておりますので、その経験もあわせてお話をいただきました。

新庄 光男氏 (Mr. Mitsuo SHINJO)



1950 年生まれ  
1972 年  
1973 年  
1976 年  
1978 年  
1980 年  
1988 年  
1990 年  
現在

鳥取大学工学部 土木工学科卒業  
海外青年協力隊参加（ネパール、2年間）  
大日本土木（株）入社  
サウジアラビア・リアド精油所工事（1年間）  
エジプト・カイロPCタンク工事（2年間）  
エジプト・ギザ上下水道工事所長（2年間）  
海外事業部東京本社勤務  
大日本土木（株）海外事業部 工事部長

今回はいくつもの海外の工事現場において現地の人々と一緒に仕事をしながら技術を伝えてきた経験をもち、また海外青年協力隊（以下協力隊と略記）への参加経験もある新庄さんにお話を伺います。

まず、協力隊に参加した時の経緯をお聞かせください。

協力隊には高校生の頃から興味がありました。おそらく雑誌かなにかでその存在を知りました。もちろん人の役に立ちたいという気持ちが一番でしたが、ちょっと不純ですけどお金をもらって海外にいけるなんて、思ったりもしましたね。当時は今みたいに簡単に海外にいける時代ではなかったですから。大学で土木工学科を選んだのも、協力隊に参加しやすいと思ったからです。

大学卒業時に就職と協力隊とどちらを選ぶか決断したのはいつ頃でしたか。

それはかなり悩みました。一応就職の内定をもらっていましたがね。ただ、当時は学生運動が盛んで、社会で働くことの意義を見出せなかったということもありましたけど、一番大きかったのは、自分の意思を貫きたいという思いです。妥協してしまい将来の自分の生き方に影響することが怖かったですね。まわりからはほとんど反

対されましたけど。

在学中に参加すればこういったことで悩む必要が無かったのでしょうか、協力隊では技術経験を重んじるので在学中での参加は無理でした。それに当時は野球の部活に熱中していましたし。

協力隊ではネパールに参加されましたけど、その時の話を聞かせてください。

ネパールでの仕事は、ネパール全土の農地を登記するための地籍測量の技術指導という立場でした。ネパール全土に測量チームが散らばっており、その巡回指導をしていました。ネパールには雨季が4～5か月あり、その間は首都のカトマンズで測量機械の修理・調整方法の指導をしていました。ちょうど任期終了のころにネパール語で測量方法のテキストを作成しましたが、かなり好評でしたよ。私の離任後も、次の担当者や現地のカウンターパートたちによって加筆・修正が加えられたと聞いています。

山歩きは好きではなかったのですが、1日10時間近く歩く日もあってだいぶ体も鍛えられました。山歩きでは、谷間を歩くときは暑苦しくて大変でしたけど、山の尾根を歩くときはどこを歩いていても壮大なヒマラヤが間近に見えて、それは絶景でしたね。

ネパールの人々とのふれあいで何か面白いエピソードなどありましたか。

測量の技術指導でさまざまな村を訪れましたが、どの村でも歓迎してもらいました。ただ、歓迎されるのはとてもうれしかったんですけど、羊の肉のにおいは苦手です。しかも、客が食べ始めないと村人は食事に手をつけないから、こちらが最初に手をつけないわけにはいかず... それにどの村でも歓迎の方法はほとんど同じなので、どこに行っても羊が出てきて、それだけはつらかったですね。

ちなみにその後ネパールにいかれたことはありましたか。

4~5年前にいきました。出張で何日か滞在したのですが、首都のカトマンズはかなり変わっていました。よく言えば近代化されたということなのでしょうが、開発が急激で昔のおもかげがなく、ちょっとがっかりしてしまいました。

次は会社に入社した後の話を伺いたいと思います。入社したときの様子から聞かせてください。

当時はオイルショックの影響で就職は超氷河期でした。恐らく今よりも厳しかったんじゃないかと思います。協力隊事務局や測量会社なども紹介されましたが、大学で学んだことを活かせる土木技術者として、できれば海外で働きたいという希望がありました。

現在の会社はある方から紹介していただきました。当時、日本社会の中にはあまり協力隊に理解が無く、「海外で遊んできた者」と思われたのか、就職にプラスにはたらくことは無かったようですが、この会社では協力隊での経験に興味を持っていただきました。それに、ちょうど会社に海外事業部ができたところで、海外への希望

もかなうと思えました。

海外事業部で海外勤務を経験されていますが、その経験をお聞かせください。

まずはサウジアラビアの西海岸沿いのジェッタというところに行きました。ここでは精油所の増改修工事でした。1年間の派遣社員として精油所内の機械基礎・排水溝・道路工事などを担当しました。この現場では工事の監督は日本人が、実際の作業はイスラム圏の国々からの出稼ぎという状況で、サウジアラビア国内の工事現場でありながら働いているのはほとんど外国人(サウジアラビア人から見て)という変な現場でしたね。それにイスラム教の聖地メッカがある国ですから戒律は厳しかったですね。生活は日本人専用のキャンプで行い、ほとんど現場とキャンプの往復ばかりでした。まあ、たまの休日にはキャンプのみんなで出かけるなんてこともありましたけど。

それにラマダンという断食期間がありました。工事計画を立てるときはこれを考慮しておかないと大変なことになります。日が落ちていない間は物を食べても良いため、作業員たちは夜明け前に起きて食いだめをして仕事に臨んでいました。でも、お昼過ぎは仕事になりませんでしたね。不思議なことに、夜にたくさん食べるので実は断食期間のほうが食料の消費量が多いらしいですよ。それに不規則な生活で体調を壊す人たちも結構いるらしいです。

サウジアラビアの現場では、技術移転という意味ではどう感じられましたか。

産油国のサウジアラビアから見れば、技術はひとつの資源というか物みたいに考えているようでした。必要な時に必要な技術を購入すれば良いということです。そういう所での技術移転は難しいですね。

サウジアラビアのあとエジプトに行かれましたけども、その時のお話を聞かせてください。

エジプトではまず2年間PC配水タンクの施工に携わりました。この現場では高温乾燥気候の中でいかにコンクリートの品質を確保するかというところに苦労しました。当時エジプトでのPCタンクは珍しく、われわれ以前にフランスの援助で造ったPCタンクは漏水が多く、プレッシャーを感じました。日本とは環境も材料も違いますから、日本と同じというわけにはいきませんでした。完成品は施主から高い評価を得ることができました。

その10年後もう一度エジプトに行きました。その時はピラミッドで有名なギザ市で上下水道整備工事の所長を担当しました。都市における長距離推進工事を主体と



ネパールの人々との交流風景

する近接施工で、地下埋設物も多い上、現地の未経験者を多数使わなければならず、そういう面で難しい工事でした。恐らく推進工事で考えられるトラブルは全部やったんじゃないかと思う現場でしたけど、無事完了した時には施工技術者としてかなり自信になりました。

海外の現場と日本の現場での大きな違いって何ですか。

かなり違います。基本的に未経験者が多いというのが一番の違いだと思います。それに品質面や安全面での意識も大きく違います。こちらが「常識」と思っている品質や安全意識などはなかなか理解してもらえないことがあります。

アジア、アフリカ、中近東と仕事で携わっていらっしゃいますが、仕事や生活の面でどう違いますか。

アジアは昔から日本の影響が大きく親日家が多いですね。宗教や文化も日本に近いですし、性格も似ているので生活や仕事もやりやすい環境だと思います。

アフリカは、歴史上ヨーロッパの影響が大きく、あまり日本のことは知られていないですね。われわれがアフリカのことをあまり知らないのと同じです。それに建設市場にも欧州の会社がかかなり食い込んでいて、その会社をわれわれの下請けとして使うことが多いので、直接現地作業員への技術指導が出来ないのが残念です。

中近東は独自の宗教文化にこだわりがあり、プライドが高いですね。仕事上はヨーロッパと同じく契約社会なのですが、アジア的なところもあって一度信頼関係が築ければ仕事はやり易くなります。

協力隊と会社と両方で海外の仕事（現場）を体験されていますが、その違いというのはありますか。

一言でいえば目的の違いです。協力隊の目的は、現地の人々に溶け込み交流を深めながら技術指導・技術移転を図ることです。それに、どちらかという個人との自由度が大きく自分の裁量で仕事を進めることができます。

これに対して、企業の目的はあくまでも利潤を生むことです。技術移転はその目的を達成するための手段ではありません。ただ、技術移転を推進しないと価格競争に勝てなくなったり品質を保持できなくなるので、おろそかにはできません。それに即ビジネスとして実践的で結果を求められます。

しかし、立場・目的は違っても技術移転の難しさ、達成時の喜びは同じだと思いますし、どちらも技術を通じて国際貢献という意味では同じだと思います。



ネパールの山岳風景

キーワードとして「技術移転」という言葉が頻繁に出てきますが、技術移転を行う際に一番気を付けなければならないことは何ですか。

技術移転というものは、相手が教える側と同等の能力をもつことだと考えます。施工条件、使用材料、職人の能力などが異なる海外では日本のやり方そのままでは通用しません。あくまでも現地の環境に合わせたものでなければなりません。現地に合ったものは現地でしか見つけられません。そして日本の技術を基本にしていろいろと試行錯誤をしながら手を加えることによって現地に最適なものが見つかります。それには長い時間と現地の人との協力が必要です。そういった意味では、突き詰めれば一番大切なものはお互いの信頼関係ということになると思います。建設技術の技術移転には、まず信頼関係を築くこと、そして日常の業務や教育を通して少しずつ行うことです。「焦らず諦めず」が大切です。

技術移転も含めて、これからの日本の土木業界の海外に対する考え方を聞かせてください。

ヨーロッパ等先進国の趨勢からも明らかなのですが、



社会資本が整備されると、当然ですが公共事業というものは減少していきます。日本もいずれそうなると思います。それに伴い、今持っている日本の施工技術は衰退してゆくことも考えられます。そうなるとこれまでの研究や投資などが無駄になってしまいますから、日本の優れた技術をもっと海外にシフトすることで建設市場のポテンシャルの高い途上国の発展に役立てればと思います。海外に協力しながら日本の技術をつなげたいですね。

それに技術だけでなく日本型の経営方式や建設マネジメントシステムにわれわれはもっと自信を持って良いと思います。できればこの面からも、もっと海外に日本を紹介してほしいですね。そして、今後日欧米型の良い点をうまく融合できればと思います。

最後になりますが、学生へのアドバイスをお願いします。

将来、皆さんが海外の仕事に携わるかどうかに関係なく少なくとも一度は海外を経験してほしいですね。海外を経験することで人間一人の力の大きさ、小ささを感じられると思います。特に個人の小ささ、逆にいえば社会の大きさを感じてほしいと思います。しかし、また小さな個人が集まれば大きな力となり、大きなプロジェクトでも努力の結果完成することができる。その過程で、現地人も含めて参加者のお互いの信頼関係が築かれます。そのような体験を味わってもらいたいですね。また、



エジプトの現場にて

昔は日本もそうであったと思いますが、完成時の近隣住民の喜びを肌で感じることも出来ます。このような喜びからこそ土木技術者としての自信と誇りを持つことができ、明日への仕事や生活の活力になるのではないのでしょうか。

今日は貴重な体験談をありがとうございました。

インタビューの際には世界地図を出して解説をしていただきながらお話しくださいました。貴重なお話のほか地理の勉強にもなり、楽しいインタビューでした。

この記事に対するご意見・ご感想は下記までお寄せください。

E-mail : [edi@jsce.or.jp](mailto:edi@jsce.or.jp)

## B O O K PICK UP



お申込み・お問合せ先

(社)土木学会・出版事業課  
TEL 03-3355-3445 / FAX 042-944-9662  
E-mail [t.tokoro@system-yamato.co.jp](mailto:t.tokoro@system-yamato.co.jp)

## 日本の近代土木遺産

### - 現存する重要な土木構造物 2000 選 -

わが国初の近代土木遺産の総合評価リスト。

全国に現存する近代土木遺産（幕末～昭和戦前期に築造）を網羅的に調査し、都道府県別、構造種別ごとにリスト化した。これまで研究者の興味に任せられ統一的な評価が確立していなかった土木遺産について、土木学会としてその重要度や評価ポイントを定め、2,000余りの重要構造物を選定した。

全国のどこにどんな土木遺産があるかを知って保存・活用を目指したり、まちづくり・まちおこしを企画するための必携書。

編集：土木史研究委員会（委員長：佐藤 馨一）  
平成13年3月発行、A4判、342ページ、並製本  
予価：2,520円（本体2,400円＋税）  
会員特価：2,270円 送料：470円

FAXまたはE-mailにて購入申込受付中

ホームページ「刊行物のご案内」  
<http://www.jsce.or.jp/>

丸善(株)・出版事業部  
TEL 03-3272-0521 / FAX 03-3272-0693